

幼児期に 「遊ぶ」を考える



目次

発刊にあたって / 4つの枠組みについて……………	1
〈コラム〉「遊び」を捉える眼を問い直す～幼児教育の基本を見つめ、未来を創る～…………	2

【保育の質の向上①】

保育の在り方から「遊ぶ」を考える

「子ども主体」の遊びと行事のつながり	
秋田大学教育文化学部附属幼稚園……………	3
「待つ・見守る・見取る」を意識した保育実践が育む幼児の主体性	
岡山大学附属幼稚園……………	4

【保育の質の向上②】

保育の基盤作りから「遊ぶ」を考える

「人とのかわり」を丁寧に見つめなおす～「遊ぶ」を通した子供の育ち～	
宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園……………	5
保育を楽しむ保育者を目標して～資質・能力が育つ状況づくりを探る～	
香川大学教育学部附属幼稚園……………	6

【組織や運営上の課題】

社会に開かれた取組から「遊ぶ」を考える

遊びについて語り合おう～多様な人々と考える“りれーごっこ”～	
静岡大学教育学部附属幼稚園……………	7
幼児の「遊ぶ」を支えるための子育て支援	
佐賀大学教育学部附属幼稚園……………	8

【今日的な課題】

国の施策や現代的課題への取組から「遊ぶ」を考える

保育実践をひろくことによって紡がれるもの	
～立場や経験、地域を超えて学び合うこと～	
奈良女子大学附属幼稚園……………	9
つながる楽しさ つながる学び～幼小の滑らかな接続を目指して～	
熊本大学教育学部附属幼稚園……………	10

令和8年度全国国立大学附属幼稚園研究テーマ一覧……………	11
------------------------------	----



本会〈全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会〉は、年に一度、全国の教員による研究集会を開催しており、今年度は第71回大会でした。近年はリモートでの開催が続いていますが、リモートの利便さも相まって、令和7年度は最多280余名が参加し学びを深めることができました。本リーフレットは、この研究集会の発表・学びをもとに作成されています。

幼児教育を取り巻く状況は、時代とともにますます複雑かつ多岐にわたっています。保育にまつわる様々なことに心を配ることが求められ、多忙な日々と言わざるを得ません。そのような中、私たちの研究集会では、令和5年度より令和7年度までの3年間「幼児期に『遊ぶ』を考える」をテーマにしてきました。全国規模の仲間と『遊ぶ』に集中して考えることの幸せと貴重さを改めてかみしめ、重要さを確かめ合うことができました。その成果が、本リーフレットとなっております。

手に取ってくださるみなさまにとっても、幼児教育の核・根底となることに向き合うひと時を過ごし、明日への活力につながれば幸いです。

全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会

(東京学芸大学附属幼稚園長)

部会長 山田 有希子

4つの枠組みについて

【保育の質の向上①】 →P3～4へ

保育の在り方から「遊ぶ」を考える

遊びで育つ力を「遊びの価値」としてとらえたり、子どもが「好き」に出会い広がっていく姿から保育の在り方に視点を置き「遊ぶ」を考えています。

【保育の質の向上②】 →P5～6へ

保育の基盤作りから「遊ぶ」を考える

子どもの多様な動きや幼児教育施設間の連携に着目するといった保育の基盤作りに視点を置き「遊ぶ」を考えています。

【組織や運営上の課題】 →P7～8へ

社会に開かれた取組から「遊ぶ」を考える

保護者と連携した「保育参加」や大学と附属学校園の協働的な取組から社会に開かれた取組に視点を置き「遊ぶ」を考えています。

【今日的な課題】 →P9～10へ

国の施策や現代的課題から「遊ぶ」を考える

学びのつながりを考えることや資質・能力の観点からの領域の枠組みの見直しなど、国の施策や現代的課題への取組の視点から「遊ぶ」を考えています。

「遊び」を捉える眼を問い直す ～ 幼児教育の基本を見つめ、未来を創る ～

文部科学省初等中等教育局 視学官 (併) 幼児教育課 幼児教育調査官 横山 真貴子

10年先を見据えた教育の議論が進められています。令和6年12月の文部科学大臣による諮問を受け、令和7年1月末から中央教育審議会教育課程部会教育課程企画特別部会において、次期学習指導要領等に向けた議論が始まりました。その議論は9月末に「論点整理」として取りまとめられ、基盤となる考え方として、多様な子供たちの「深い学び」を確かなものにし、「生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、自らの人生を舵取りすることができる民主的で持続可能な社会の創り手をみんなで育む」ことが示されました。

現在、この論点整理を踏まえ、各教科等の専門部会等で議論が展開されています。幼児教育においても幼児教育ワーキンググループが、こども家庭審議会幼児期までのこどもの育ち部会保育専門委員会と合同会議をもちながら検討を進めています。論点整理において、検討の方向性として示した「直接的・具体的な体験の一層の充実」「幼児教育と小学校教育との円滑な接続の推進」「地方自治体における支援体制の充実・強化」を踏まえ、「育みたい資質・能力の在り方」や「資質・能力の育成に向けた内容の改善・充実」などについて、議論を重ねています。

この議論において繰り返し強調されているのが、幼児教育の基本である「環境を通して行う教育」と「自発的な活動としての遊び」です。単に「遊び」ではなく「自発的な活動としての遊び」と表現されていることに強いメッセージが込められています。「遊び」とは何か、私たちの「遊び」を捉える眼が問われています。「遊び」と称して、子供に一方的に活動を提供していないか。遊びが、真に子供の興味

や関心に基づいた活動となっているか。子供は夢中になり、没頭し、充実感や満足感を味わっているか。遊びが「心身全体を働かせ、様々な体験を通して心身の調和のとれた全体的な発達の基礎を築いていく」、幼児期特有の学習となっているか、改めて見つめ直すことが求められているのです。

国立大学附属幼稚園のみなさんは、『幼児期に「遊ぶ」を考える』をテーマに3年間、研究を重ねてこられました。改訂に向かう議論に先立ち、「遊ぶ」主体を意識化し、新たなまなざしで「遊び」を捉え直そうと提言し、挑戦されてきました。今、まさに問われている幼児教育の課題に着目し、先進的に実践研究に取り組まれてきたのです。子供の視点から遊びや活動を見つめ直し、事例研究や園内研修等を通して子供の育ちや学びを丁寧に捉えることで、子供理解を深め指導の改善につなぐ。「遊ぶ」を視座に置きつつ、主体を幼児から広げることで、幼小接続や子育ての支援の在り方を検討する。さらには社会に実践を開き多様な他者と「遊ぶ」ことを語り合う新たな取組を展開する。そうした成果が本リーフレットにまとめられています。

子供たちは、これからますます不確実性が高まるであろう時代を生きていきます。子供たち一人一人が多様で豊かな可能性を花開かせ、自ら人生の舵を取り、荒波を越えていく力を育んでいけるよう、附属幼稚園のみなさんには、これまで以上に地域の、そして日本の幼児教育を牽引する役割を果たしていただきたいと願います。



「子ども主体」の遊びと行事のつながり

「『子ども主体』の遊びを問い直す」という研究主題のもと、「子ども主体」と保育者の援助や意図との関連や、主体性を促すような環境構成や教材研究について実践を通して考えてきた。「子ども主体」の遊びとは相容れないような行事になっていないだろうか、子どもの「遊ぶ」姿と、少し特別感のある行事の関連や、行事を経験することによって日々の保育がどのように変容するのかということを子どもの姿から問い直した。

運動会は運動会？（昨年度の実践から）

令和6年度に、数年ぶりとなる全学年合同の運動会を実施した。運動会は本来、気持ちよく身体を動かすことをねらいとしているが、子どもたちはどのように感じているのだろうか。「子ども主体」といいながら競争に重きをおいていないだろうか、運動会実施の可否も含めて年度当初から話し合いを続けてきた。

昨年度の年長児は、乗り物を丁寧に作る子どもが多く、関心も高いことから、新幹線のこまちとはやぶさが連結するイメージを大切にしながら「新幹線でレッツゴー!」を行った。新幹線に見立てた段ボールを2名ずつで運び連結させていった。また絵を描くことが得意な子どもを中心にしながら手作りの入場門に自分たちで描いた絵を貼ったり、踊ることが好きな子どもは全園児で踊るダンスの振り付けや曲を一緒に考えたりした。一方で、年長児では思いきり走るリレーは実施したいという担任の思いから、後日、園庭で保護者を招待してリレーを行った。

年中児、年少児が今まで行ってきた「玉入れ」についても、この時期の子どもにとって、競い合うことよりも一緒に玉を入れる楽しさを感じられるように工夫をしながら実施した。

乗り物を作ることが多い年長児。この遊びを運動会でも活かしたい。



新幹線のこまちとはやぶさが連結するイメージのリレー。2名ずつで段ボールを運び連結させた。



年少児の玉入れ。競わせるのではなく、一緒に玉を入れることを楽しんだ。



屋内での運動会だったので、リレーは後日、園庭で実施した。



日々の保育とのつながり（今年度の実践として意識している課題）

気持ちのいい5月頃、昆虫や様々な虫が好きな子どもたちの興味・関心が、少しずつではあるが様々な植物に向いてきていた。サツマイモの苗植えを行った年長児は、数日前から、絵本を通して自分たちが植える苗やその苗が大きくなってサツマイモになる様子をイメージしたかもしれない。苗植えから帰ってきた後、年少児や年中児にどのような交流をしてきたのかを話したり、「苗は種と違うんだよ」と実際の様子を話したりしていた。また保育者が持ってきた植物を、一緒に植える年中児の姿も見られた。

そのような子どもたちの姿から、全園児が集う「つどいの日」では、保育者が「大きなかぶ」の劇を行った。全保育者が劇をするという経験も子どもにとっては新鮮だったようで、その後、学年を超えて遊びの中で繰り返し一緒に「大きなかぶ」をして遊ぶ姿が見られた。年長児は保護者懇談会において自分たちで劇をしたり、収穫した植物で調理をしたりもした。

附属特別支援学校高等部の生徒とのサツマイモ交流。まずは苗植えを一緒に行った。



年長児の様子を見て、年中児もピーマンやおもちゃかぼちゃを植えた。



遊びの中では、年少児も年中児も入り、学年を超えてやっている「大きなかくい」。



ふようのつどいは保育者が「大きなかぶ」を行ったが、後日、年長児が保護者の前で「大きなかぶ」を行った。



方向目標としてのねらいが行事の計画においては到達目標になっていないだろうか、ということが課題としてある。単なるイベントとしてではなく、教育課程に位置付けられる行事として、日々の保育のつながりを保育者が意識することも重要である。また遊びを通して一緒に過ごすことや、子ども同士が理解し合うことにより、心地よい集団に「なる」過程を大切に、その延長上に行事を位置付けることを保育者が意識していきたい。園での文化を創造することや、行事がきっかけとなり日々の遊びが変容することもあるかもしれない。「子ども主体」の行事として、より子どもたちが楽しめる経験を保障していきたい。

「待つ」「見守る」「見取る」を意識した保育実践がはぐくむ 幼児の主体性

本園では、幼児の主体性を「幼児が自ら環境にかかわり、身の回りの人や物、ことに会った時に自分で感じ考えて行動する姿」と捉え、主体性をはぐくむための環境構成及び教師の援助を探る研究を進めてきた。

1.これまでの研究について

幼児の主体的に遊びにかかわる姿を育んでいくために、保育の中で見られる幼児の主体的な姿と環境構成及び教師の援助について、エピソードを取り上げながら教師間で話し合いを行った。その中で、下図の三つの視点を意識して保育に取り組むことが幼児の主体性を支えていくために有効であることが明らかになった。

▶ 教師は幼児が周りの環境に対して

自分から関わることを「待つ」

▶ 幼児が自分からしようとしているときには「見守る」

▶ 幼児との言語的な対話を通して、

教師が幼児の思いや願いを丁寧に「見取る」

2.研究の方法について

教師が3つの視点をより意識して保育を行うために次の3つの方法で実践に取り組むことにした。

- ① 学年ごとに育みたい幼児の姿を発達過程や時期に応じて考える
- ② 幼児の興味関心を踏まえて環境構成、教師の援助について教師間で共通理解
- ③ 学年ごとに具体的な視点を可視化
(例:待つ =自分から関わろうとするまで待つ
見守る=したい遊びを見付けて遊び始めたときには、どのようなことに楽しさを感じ、取り組んでいるのかを見守る)

3.実践事例

()は「待つ」「見守る」「見取る」の視点を意識した教師のかかわり、太字は教師の援助から引き出された幼児の主体的な姿

3年保育4歳児6月

抽出児A児の実態 自分の興味のある遊びにかかわってはいるが遊びを転々とする事が多い

教師の願い 自分なりに考えたり思い付いたりしたことをしてみようとしてほしい

そこで

・A児が興味のある遊びにかかわろうとする姿が見られるまで待つ

・A児が思いや考えを伝えたいと思えるように問い掛け思いを見取ったり、確かめたり引き出したりできるようにしよう

自分なりの思いや考えをもって遊びに取り組んだり、表出したりする主体的な姿を育むことができるかもしれない

事例「段ボールの家づくり」

数日前から数名の幼児が段ボールの衝立を使って囲いをつくり、家に見立てて遊んでいる。A児はその様子を側で見てはいるが遊びには入らず、しばらく見ると違う遊びに行き、また戻ってきて見るということを繰り返している。教師は、A児はやはりこの遊びに興味をもっていると見取り、A児が自分からかかわろうとするのを待つとともに、したいと思ったときにはすぐに教師に言ったり、一緒にしてみようとできるように一緒に遊ぶ姿を見せるようにした。すると、A児は遊びの中に入ってきて教師に「家をつくりたい」と言う。教師は「どんな家がつくりたい？」「何を使ったらいいかな」等と問いを引出す声掛けをする。それに対してA児は「大きい家」「衝立がいいかな」と答える。引き出したA児の思いを基に一緒に衝立を使って家をつくるが、納得していない表情である。そこで、A児の思いを見取るために様々な大きさの段ボールを用意し、A児がイメージしている家に合わせて材料を選ぶことができるようにし、A児が自分から遊びにかかわろうとするのを待つようにした。A児は、様々な段ボールを見付けると自分のイメージに合う段ボールを選び、教師に「大きい家がつくりたい」と言う。教師は、A児がより具体的なイメージをもったり、イメージを自分なりに表現しながら遊んだりすることができるように、「この家はどうやって入るの？」「どうやってつくる？」等、一緒に考えたり、つくり方を問い掛けたりする。A児は「扉から入る」「切って扉にしたい」等と答える。教師はA児の思いが実現できるように、使う道具やつくり方を一緒に考えたり、手を添えてつくるを手伝ったりする。A児は扉ができると笑顔で中に入ったり、中で座ったりする。そして、教師に「もっと広くしたい」と言ったり、広くするための段ボールを探しにいったりして同じ遊びに取り組み続ける。

4.考察

A児が友達の家づくりの遊びを見続ける姿を見守ったことで、その遊びに興味があると見取ることができた。そして、A児が自分からかかわろうとするまで待ち、問いを引出すかかわりをしたことで、A児は思いを表したり、自分なりに考えて挑戦したりする姿へとつながった。

このことから、「待つ」「見守る」「見取る」を意識した環境構成や教師の援助は、幼児の興味や内にある思いをとらえ、深い理解につながることが分かった。また、具体的な視点をもちて関わることで、幼児が自分の思いを表出し、主体的に遊びにかかわる姿へとつながっていくと考える。

今後も幼児の主体性をはぐくむための教師の援助や環境構成について考える中で、具体的な視点をもちて振り返ったり、職員間で共通理解したりしながら、幼児の発達時期や実態に合わせたかかわりを心掛け、幼児の育ちを支えていきたい。

「人とのかかわり」を丁寧に見つめ直す～「遊ぶ」を通した子どもの育ち～

昨今、子どもが家族以外の人と活動を共に経験することが少なくなっている。そのような現状を踏まえ、幼児期に保育の中で、子どもが自分以外の他者とのかかわりを通して、どのようなことを経験し、どのような力が育まれていくのかを年齢ごとに考察することで、幼児期に人とかわるの意義を改めて考えた。さらに、幼児期の人とのかかわりを支える上で教師として大切にしたいことを明らかにした。

3歳児のエピソードをもとに考察(例)

「初めて一人でできたんだよ」(3歳児5月)

周りの子がジャングルジムに登っているのをじっと見ているA児。しばらくして「先生登りたい。」と言ってきた。A児の体を支え、足を置く位置を知らせると、少しずつ登っていった。一番上まで登ると「離さないでね。」と言い、景色を見てにこにこしていた。ある日、教師のところにA児が興奮した様子でやってきた。ついていくと、ジャングルジムに手を伸ばしゆっくりと一人で登っていた。一番上まで登り、降りてくると「初めて一人でできたんだよ。」と満足そうな表情で話した。



経験していること

- ・ やってみたい思いをもつ
- ・ できなかったことができたことへの満足感

育まれている力

- ・ 自分の可能性が広がる
- ・ 期待感をもって関心事に取り組もうとする

年齢ごとの人とのかかわりの様相とは？



育ち

自分から友達とかかわろうとする

やってみた
満足感・喜び

一緒にいる雰囲気
が楽しい

教師への安心感

3歳児の保育から
～教師への安心感を支える～

- 安心感をもてるようにかかわる
- 友達への関心を支える

- 友達とかかわり、つながり、遊びを進めていけるような環境を整える
- 思いの伝え合いがうまくいかない際に、伝え方や遊びの進め方を一緒に考える
- 人間関係を把握し、必要なときに、必要な援助をする

友達と共に活動することの
楽しさ、満足感、充実感

思いや考えを伝える

自己主張の
ぶつかり合い

葛藤しながら…

友達の思いを感じたり、
受け止めたりする

イメージや目的、ルールの共有、
工夫、協力する姿へ

育ち

4歳児の保育から
～教師や友達と様々な経験を積み重ねて～

- 友達との仲介役としてかかわりを支える
- 遊びの仲間になり、思いを代弁したり表出したりできるよう支える

教師として大切に
したいこととは？

5歳児の保育から
～友達とかかわり、つながり、遊びを進めて～

育ち

目的の実現に向かって、遊びをよりよくするために、自分たちで
アイデアを出し合ったり、協力したりして
充実感を味わう

友達からの刺激を
取り入れて遊ぶ

自分たちで遊びを進めていく
ことを楽しむ

年少組、年中組での経験



<研究を通して>

「人とのかかわり」を丁寧に見つめ直すことで、その年齢らしい姿と経験、育まれている力についての考察を深めることができた。また、幼児の内面を理解し、保育を振り返る視野が広がったり深まったりした。



保育を楽しむ保育者を目指して～資質・能力が育つ状況づくりを探る～

本園では、共に支え合い、学び合い、育ち合おうとする職員関係性を築きながら、それぞれの保育者が自分らしさを発揮するとともに、「子どもと共に楽しむ園生活」のさらなる充実に向けて実践を重ねてきた。無理のない、かつ、保育の質の向上を目指した日々の振り返りにおける子ども理解と自分理解の積み重ねや継続は、子どもと共に園生活を楽しむことにつながっている。

また、子どもたちの自ら学ぼうとする姿が小学校以降の生活や学習につながっていくことを願い、「資質・能力の育ち」やその育ちを支える「状況づくり」にも目を向けて研究を進めてきた。幼児の具体的な姿から、3つの資質・能力が一体的にはぐくまれる過程を整理・分析し、その「状況づくり」についても深く読み取っていくことを通して、遊びを通した学びの様相を明らかにしていった。

資質・能力の育ちからとらえる「事例研究」

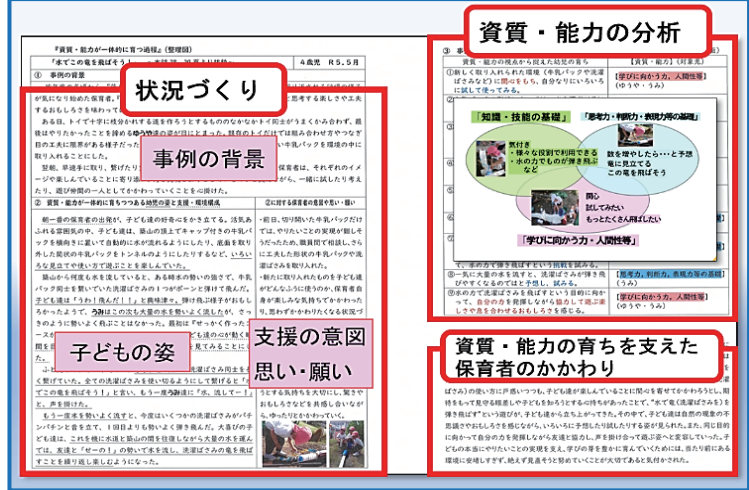
保育記録は、その日一番心に残った子どもの姿や保育者のかかわりなどを振り返り、明日の保育に生かせるよう努めている。その中で特にじっくり考えたいものを事例に起こし、事例検討を行うことで、多角的な視野から幼児理解や自己理解を深めていった。さらに資質・能力に焦点を置き、どのような育ちや学びの様相が見られたのかを取り出してとらえ、そこにはどのような状況づくりがあったのかについても深く読み取っていった。

資質・能力が一体的に育つ過程を示す「整理図」

資質・能力の視点からとらえた幼児の育ちを、事例の時間軸に沿ってまとめて可視化し、整理図を丁寧に読み取っていくことで、以下のような学びや育ちのプロセスを見いだすことができた。

- ・子どもの学びの出発点は、環境や遊びに対する興味・関心や“～したい”と思う心情や意欲、つまり『学びに向かう力、人間性等』から始まっている。
- ・子どもは、遊びの中で自ら対象に働きかけて遊びを展開していく中で、心の中にある思いや欲求が表情や身振り、言葉などに表れる。このことから、幼児の育ちの姿には、行動面だけでなく情意面も含まれている。
- ・『学びに向かう力、人間性等』を起点とし、最後は“もっと～したい”と、さらなる学びへと向かう力につながっていく。

③ 事例の時間軸に沿った幼児の資質・能力の分析 (赤字＝情意面、青字＝行動面)	
資質・能力の観点から捉えた幼児の育ち	【資質・能力】(えいど)
① 忍者のふんしに強い憧れをもち、早く作りたい気持ちをもって参観する。	【学びに向かう力、人間性等】
② 忍者のふんしに合った素材や色を友達と一緒に選びながら、作りたい気持ちでさらに高めていく。	【学びに向かう力、人間性等】
③ 五月人形の鑑づくりにて、寝転がり身体の大きさをなぞると、身体にピッタリの大きさを測り取ることができるという経験を積んでいる。	【知識及び技能の基礎】
④ 鑑と同様にふんしでも、寝転がり身体の大きさをなぞる方法で作ると、身体にピッタリの大きさを作れるだろうと、関連付けて考えやってみようとする。	【思考力、判断力、表現力等の基礎】
⑤ ふんしでは、前身頃と後身頃がくっついた一枚の長い布であるため、印を付けて長さを付け足すとするのではないかと聞き、やってみようとする。	【思考力、判断力、表現力等の基礎】
⑥ 切り取った不織布を身に付けると短すぎたが、なんとかしようと、解決策を考える。	【思考力、判断力、表現力等の基礎】
⑦ 実際合わせてみる中でふんしが短いことに気付いたが、落ち込んだり諦めたりすることなく、自分ならなんとかなるかと、思いついた方法で試す。	【学びに向かう力、人間性等】
⑧ 不織布にセロテープを貼ると留まりにくいという素材の組み合わせを実感をもって知り、残念がる。	【知識及び技能の基礎】
⑨ 明日は何としても、友達と一緒にふんしを完成させたい意欲を明日へつなげていく。	【学びに向かう力、人間性等】



<整理図>

幼小の互いの教育について理解を深める「接続検討会」

幼小合同での事例研究や整理図の読み取りを行う中で、双方の資質・能力のとらえ方や見え方の違いについて話し合う機会を大切にしている。「ちょこっと参観・ちょこっと交流」を合い言葉に、互いの教育を参観する中で気付いたことを語り合う場も増えてきた。今後も互恵性のある交流や連携を通して、接続期における支援の在り方や教師の心もちとして大切にしたいことなどについて、共に考えていきたい。

遊びについて語り合おう ～多様な人々と考える“リレーごっこ”～

本園では「協働型」園内研修(中坪,2018)に取り組み、互いがもつ情報や経験を語り合ったことで、職員の一人一人が遊びを多角的な視点で捉えることができた。公開研究会でも同じことを意識して取り組んだところ、少子化や気候変動の影響を受けて困難さが増す保育の課題を、地域の保育者と共有し合う機会になった。そこでは遊びを多様に捉える視点や保育におけるそれぞれの工夫が共有され、参加者たちは自身の保育を見直したり課題解決の糸口を掴んだりしていた。社会的変化が進む予測困難な時代の保育では、いろいろな立場の人と遊びについて語り合い、多様な見方や捉え方を保育に活かすことが求められる。

厳しい暑さが続く9月・・・



暑さでリレーから抜ける子が多く、遊びが続かない

9月のねらい
・様々な運動的な遊びに自分なりのめあてをもち、体を動かして遊ぶ楽しさを味わう

園内研修

前任校では全員が楽しめるよう、チームで協力することを大事にしていた (元小学校教諭)

早く涼しくなって、体を動かす気持ちよさとか感じられるといいな (養護教諭)

養護教諭としての願い

小学校勤務時代の情報

リレーにこだわらず、まずは体を動かす気持ちよさを感じられる方法を探ってみよう (担任)

人数が少なくなると大変だよな
今、この子どもたちが感じている楽しさってどこにあるのかな (園長)

担任の悩みを受け止めつつ、
幼児の実態を再確認する提案

ファシリテーターの存在

公開研究会

〈参加者〉
地域の保育者・市教委
大学教員・園内職員など

情報の提供 *1

発言の
対等性を
保障するために

安心感のある雰囲気

自園の子どもたちも、この暑さで十分に体を動かすことができず困っている

私のクラスは人数が少なくて・・・

悩みの共有

この時期は“競う”、“思いきり体を動かす”体験は大事にしたいですね

発達に必要な
体験の問い直し

私の園は例年の運動会をやめて、日々の遊びの延長線上にある行事を模索しています

行事の見直し

語り合い後

ねらいの考え方はいろいろあるけれど、リレーを通して何を体験してほしいのか改めて考えよう



室内でも思いきり体を動かして遊ぶ機会を増やそう



研究会後

参加者

アンケートより

“例年通りの保育”ではなく、
今を生きている子どもたちに
どのような力が必要なのか
考えよう。

*1 指導やコメントではなく、熟考するための材料として“情報”(自己開示を含めた自主的な叙述的発言)を提供すること(若林, 2005)

幼児の「遊ぶ」を支えるための子育て支援

本園は、子どもの「遊ぶ」を支えるためには、まず不安を抱えている保護者を支える必要があると考えている。そこで、子ども達が豊かな遊びを通してその子らしく成長していけるよう、在園児保護者や地域の未就園児の保護者を対象に「幼児期について」や「遊びの大切さ」などを伝えることを目的とし、以下の取組を「子育て支援」として行っている。(以下、○…成果，▲…課題)

保育参加



○保護者と子ども達の育ちやかかわり方を共有する機会となった。

▲保護者に保育の意図を明確に伝える工夫。保育参加への参加方法や回数の見直し。



子育て談話室



○保護者が発達の見通しをもつことで、安心し前向きに子育てに取り組む一助となった。また、子どもの見方を広げ、かかわり方を捉え直すきっかけに繋がった。

▲談話室への参加方法、テーマの工夫。

小さい子に来る日 子育て支援ワークショップ (未就園児親子保育参加)



ぱんだのおへや (未就学児親子活動)



ぱんだのおへや (未就園児親子相談)



こあらのおへや (在園児・卒園児親子相談)



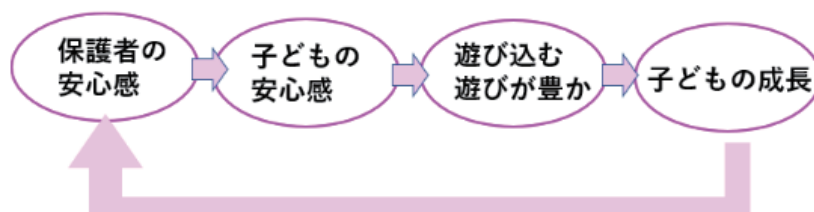
○未就園児親子から卒園児親子が安心して遊んだり気軽に相談したりする場となった。

▲広範囲に周知できるような発信の工夫。

本園で行う子育て支援を通して、少しずつではあるが保護者の子どもの見方が広がったり子育ての自信や安心感に繋がったりしていると感じる。保護者が安心感をもって子どもを見ることができるようになると、子どもは自己を発揮しながら伸び伸びと遊ぶことができる。自己を発揮しながら遊び、そこに保育者の援助が加わると遊びが豊かになる。そして、子どもの遊びが豊かになることで、よりよい成長に繋がると考える。さらに、子どもの成長する姿がフィードバックして保護者の安心感に繋がり、好循環が生まれる。これからも保護者の実態に合わせた切れ目のない子育て支援を行い、保護者と共に幼児の「遊ぶ」を支えていきたい。

子育て支援をすることによって

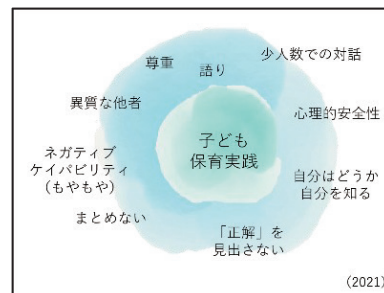
- ・保護者の子どもの見方が広がる
- ・子育ての自信や安心感に繋がる



保育実践をひろくことによって紡がれるもの ～立場や経験、地域を超えて学び合うこと～

多様な人とともに、保育の面白さや豊かさを感じていきたい。そう考えたとき、「遊ぶ」は、子どもだけのものなのだろうか、という問いが生まれた。教育において、主体となるのは子どもや教師だけではない。そこには、保護者、実習生、異校種の実践者など、周囲を取り巻くさまざまな人がいる。その誰もが、主体的に「遊ぶ」ということを探究していくことができるのではないか。そう考え、さまざまな立場や角度からの「遊ぶ」の可能性について考えていった。

本園では、実践を「語り合うこと」が土台として位置づいている。2021年より、保育後にD.D. (Daily Dialogue) と名付けた15分間の振り返りの場を設けた。この時間は、保育中の感覚や判断や迷い、葛藤といった言葉にしにくい考えや感情も含めて語り合っている。右図が、語り合いで大事にしていることである。正解を探したり、一つの結論を出したりするためではなく、一人一人が何を感じ、考えているのかを重ねながら、自らの実践に還していく時間としている。



- 教育実習生の「遊ぶ」 -

教育実習中に、実習生の学びを踏まえたワークショップ型研修を実施した。教師と学生の「教える」「教えられる」の関係性を越えた学び合いの場を模索した。砂場で「遊ぶ」ことを通して、自らの心地よさや価値観に気付き、他者と語り合う中で保育実践を捉え直していった。身体感覚を通して捉えた学びは次の実践に活かされ、抽象的になりがちである保育実践の言葉を身体化させていく契機となった。



- 保護者の「遊ぶ」 -

保護者を対象とする保育参加は教師の「お手伝い」ではなく、保護者自身が感じ、考えたことを大切に、保育の場に身をおいていただいている。次第に各々のモチベーションを発揮し、参画する姿が見られるようになった。終了後には各学級30分程度の語り合いの場を設けている。保護者が「遊ぶ私」として参画し、他の保護者と語り合うことを通して、自らの教育観に気付き、多様な視点から実践を捉え直す機会となっている。



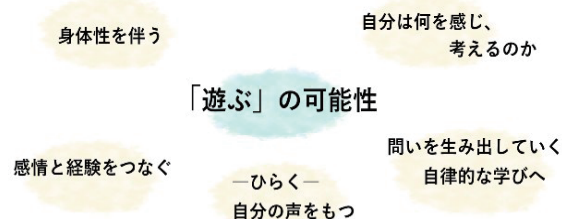
- 異なる園・校種の「遊ぶ」 -

遊びのもつ力を土台に据えた協働探究型研修を実施した。幼児教育関係者、小中高特支大学教員、行政職員、学生、保護者、企業人など多様な参加者が加わった。研修では参加者が遊びその後属性を混在する小グループで体験を振り返る語り合いを行った。高校教員や行政職員は自身の仕事の仕方や組織の在り方を見つめ直した。幼児教育にとどまらず、各々の実践を問い直す契機となった。幼児教育に関わる実践者にとっても、当たり前を再考する機会となった。



幼児教育に閉じない社会的な実践として

—「遊ぶ」の可能性を考える—



身体性を伴って「遊ぶ」過程には、感情や思考が立ち現れる。ここでいう「遊ぶ」とは、子どもになりきったり、子どもの遊びを単に疑似体験したりすることではない。わたしたちが子どもを取り巻く主体となると、自らの身体を通して「遊ぶ」を捉えることに大きな意義がある。遊ぶことを通して何を感じ、考えるのかに目を向けることで、経験と感情が結びつき、新たな問いが生まれる。それは、自律的な学びの土壌となり得る。さらに社会的な実践として、多様な人とともに「遊ぶ」を考えていくことは、ひいては、子ども自身の「遊ぶ」をも豊かにすると考えられる。

つながる楽しさ つながる学び～幼小のなめらかな接続を目指して～

「幼児期の『遊ぶ』を様々な人たちに、どのように伝えていくのか」を考えた。幼小連携を充実していくためには、保育者と異校種の教師が「遊ぶ」について理解を深めていくことが大事なのではないのだろうか。

本園では、子ども達の「やってみたい」という思いを大切に、幼小連携を充実させ、子ども達が幼児期の学びを活かしながらスムーズに学校生活を送ってほしいという願いから、私たち教師同士の交流、1年生と年長組の交流を計画していった。しかし、今後幼小で子どもの学びをつなげるためにどのような交流を行っていくべきなのか、幼稚園での「遊ぶ」をどのように伝えていくのか、子ども達にどんな学びが必要なのか悩みながら実践を行った。

○子ども達の具体的な姿や教師同士の交流

1回目、2回目の交流を経て、出てくる思い

1年生が考えてきた制作遊び



よろしくね！



おちゃらかをして遊ぶ



遊んでいないから
楽しくなかった

交流をについて考えるきっかけへ

年長児と1年生だけでなく、教師同士もねらいや幼児期の「遊ぶ」の捉え方にズレが生じていたことで、子ども達から「楽しくなった。」という言葉が出たのだろう。交流をなんのために行うのか、子ども達がやりたいことは何なのか、教師は何をねらうのか、そのようなことを改めて考えさせられた交流であった。

1年生とやってみたい遊びについてみんなで考える

普段年長児がしている遊び

1年生から提案された遊び

を一緒に楽しむ



どんな遊びをしたいの？



楽しかったね

やりたい遊びが違ったらどうする？

つながっていく年長児と1年生

年長児と1年生とで互いに授業や保育の目的を明確にして交流を行なった。すると、互いに関わり合って遊ぶことができ、年長児も1年生もこの日を満足して終えることができた。そのため、前回「楽しくなかった。」と言った年長児からも「とても楽しかった。」「もっと遊びたかった。」という声を聞くことができた。

小学校のことを知り、1年生体験へ



つながることができた年長児と1年生

この交流を終え、自分の思いを伝えることの大切さ、相手の思いを聞いて折り合いをつけることの大切さを学んだ年長児。期待と自信をもって進学できるだろう。

幼稚園と小学校の行事

年長児の遊び・1年生の単元

年長児と1年生の人と関わる力

年長児と1年生の生活する力

年長児と1年生の学ぶ力

架け橋期のカリキュラム（試案）

この実践を通して、幼稚園側と小学校側とで交流に対する願いは共通していたが、保育のねらい、授業のめあてですれ違っていた。しかし、互いの思いに寄り添いながら丁寧に話し合いを重ねていくことで、職員同士がつながり、年長児と1年生がつながることができたのだと実感している。これからも、子ども達の滑らかな接続のために、この架け橋期のカリキュラムをどのように活用していくのか、幼児期の「遊ぶ」をどのように伝えていくのか、幼児期の「遊ぶ」を、小学校での学びにどのようにつなげていくのかについて考え、実践を重ねていきたい。

園名	令和8年度研究テーマ	公開研究会等開催日
1 北海道教育大学 附属旭川幼稚園	「質の高い保育の探求」 ～遊びが“つながる・ひろがる” 保育のデザイン～	12月中旬を予定
2 北海道教育大学 附属函館幼稚園	未定	7月27日(月)
3 弘前大学教育学部 附属幼稚園	「遊びこむ子どもを育てる保育」 ～挑戦したくなる場づくりと 援助の工夫を通して～	保育トーク6月27日(金) 四校合同11月7日(土)
4 岩手大学教育学部 附属幼稚園	心はずませ遊ぶ子どもを育て(仮)	6月24日(水)～ 6月26日(金)
5 宮城教育大学 附属幼稚園	持続可能な社会の担い手を育て 環境とその援助(第5年次)	6月24日(水) 1月28日(木)
6 秋田大学教育文化 学部附属幼稚園	「子ども主体」の遊びを問い直す	6月25日(木) 10月29日(木)
7 山形大学附属幼稚園	見取りから保育を見つめ直す	6月4日(木)
8 福島大学附属幼稚園	子どもの主体性を中心とした対話 的保育を考える	11月13日(金) 11月14日(土)
9 茨城大学教育学部 附属幼稚園	挑戦できる環境づくり ～「好き」を育み、「得意」を伸ばす～	10月22日(木)
10 宇都宮大学共同 教育学部附属幼稚園	子どもの未来につながる幼稚園の 暮らし ～「自ら」を問い直す～	6月13日(土)
11 群馬大学共同教育 学部附属幼稚園	あきらめないでやり遂げる幼児の 姿を育てる保育(三年次)(仮)	11月14日(土)
12 埼玉大学教育学部 附属幼稚園	「遊びを通した幼児教育」への 理解を深め広げる発信の工夫	6月23日(火)・11月13日(金) 1月21日(木)
13 千葉大学教育学部 附属幼稚園	保育を語る・語り合う 一開かれた研修から 保育を問い直すー	実践研究会 7月4日(土) 幼児教育研究会 2月13日(土) 保育を語る会 6月5日(金)・10月2日(金)
14 東京学芸大学附属 幼稚園小金井園舎	環境を通した保育を見直す ～共に場をつくる、楽しむ～	学年別公開保育検討会 5月29日(金)・6月2日(火) 6月12日(金) 研究協議会1月29日(金)
東京学芸大学附属 幼稚園竹早園舎	みんなでつくる未来の学校 プロジェクト(仮)	1月下旬予定
15 お茶の水女子大学 附属幼稚園	「つくる」がうまれる暮らし 4年次 ーつながるー	2月5日(金)
16 山梨大学教育学部 附属幼稚園	未定	12月5日(土)
17 新潟大学附属幼稚園	自ら動き出す子供の育成 ー心を動かし環境に 働きかけて遊び込むー	10月30日(金)
18 富山大学教育学部 附属幼稚園	子供の主体的な活動を支える 教師の役割 副題は未定	6月19日(金)
19 金沢大学人間社会学域 学校教育学類附属幼稚園	幼児の姿からつむぐ指導計画 (4年次)	6月13日(土)
20 福井大学教育学部 附属幼稚園	好きが広がり、世界をひらく 遊びにおける展開の可能性を探る (2年次)	10月31日(土)
21 信州大学教育学部 附属幼稚園	探究心の根をのばす子ども ～「自ら動き出す姿」を視点に 援助を考える～	一般公開保育 5月19日(火)・6月15日(月) 9月15日(火)・11月10日(火) 2月4日(木)
22 上越教育大学 附属幼稚園	未定	9月30日(水)
23 静岡大学教育学部 附属幼稚園	“えらぶ・きめる・うけとめる” を追う	11月18日(水)
24 愛知教育大学 附属幼稚園	未定	6月4日(木)

園名	令和8年度研究テーマ	公開研究会等開催日
25 三重大教育学部 附属幼稚園	「やってみよう」から「やりたいへ」 ～遊びの質の変容をみとる～	11月7日(土)
26 滋賀大学教育学部 附属幼稚園	“いま”を生きて × “これから”を 生きぬく力を育てる保育(5年次)	11月25日(水)
27 京都教育大学 附属幼稚園	就園前から架け橋期を見据えた教育 課程のあり方について(第4年次)	11月28日(土)
28 大阪教育大学 附属幼稚園	学びをつなぐ教育課程の創造 ～子どもと教師で共に作りだす生活～	1月31日(土)
29 兵庫教育大学 附属幼稚園	ティンカリングに内在するイテレーション を基盤としたSTEAMへの誘い(仮)	12月5日(土)
30 神戸大学附属幼稚園	遊びの中の学びを見取る	5月30日(土)
31 奈良教育大学附属幼 連携型認定こども園	共に創る保育～持続可能な社会の担い 手を育てる教育課程の開発(5年次)～	11月28日(土)
32 奈良女子大学 附属幼稚園	ともに世界に意味を創り出す教育 をデザインする ー「痕跡」から描き出す全体構想ー	6月13日(土)年長 11月13日(金)年中・少
33 鳥取大学附属幼稚園	「やってみよう」を支える保育	未定
34 島根大学教育学部 附属幼稚園	「新しい自分を創る」～自立した 学び手が育つ探究的な学び～(仮)	11月4日(水)*附属義 務教育学校と合同開催
35 岡山大学附属幼稚園	未定	10月31日(土)
36 広島大学附属幼稚園 (東広島園舎)	子どもの主体的なかかわりを再考する ーESDの視点に立った教育課程の 見直しに向けてー(4年次)	10月29日(木)
36 広島大学附属幼稚園 (三原園舎)	未定	12月5日(土)
37 山口大学教育学部 附属幼稚園	自ら学びをつなぐ子どもの育成	11月27日(金)
38 鳴門教育大学 附属幼稚園	遊誘財研究を生かした保育者の 専門性向上への取り組みⅢ	未定
39 香川大学教育学部 附属幼稚園	子どもの育ちと学びを支える ～心が動く状況づくりを探る～	1月29日(金)
39 香川大学教育学部 附属幼稚園(高松園舎)	未定	2月 幼小交流活動 のみ公開
40 愛媛大学教育学部 附属幼稚園	夢中になって遊ぶ子どもの姿を 求めて～学びをつなぐ～	2月5日(金)
41 高知大学教育学部 附属幼稚園	子どもとともに遊びを創る保育者	1月23日(土)
42 福岡教育大学 附属幼稚園	未定	11月7日(土)
43 佐賀大学教育学部 附属幼稚園	保育の質を高める環境を探る	未定
44 長崎大学教育学部 附属幼稚園	未定	1月23日(土)
45 熊本大学教育学部 附属幼稚園	これからの「くらし」を考える (2年次)	1月23日(土)
46 大分大学教育学部 附属幼稚園	主体的な遊びを支える保育をめざ して(3年次)	2月11日(木)
47 宮崎大学教育学部 附属幼稚園	未定	1月29日(金)
48 鹿児島大学教育学部 附属幼稚園	未定	1月29日(金)

近畿地区奈良大会 滋賀大学教育学部附属幼稚園

〒520-0817 滋賀県大津市昭和町10-3
TEL:077-527-5257 FAX:077-527-5262
Eメール: shiga-fuyou@edu.shiga-u.ac.jp

発行

全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会
事務局：東京学芸大学附属幼稚園

編集